



励ましの言葉

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

本校は今年の3月6日で101年目を迎えました。つまり、次の100年に向けて第一歩を踏み出したのが、第61回目の卒業生の皆さんです。本当におめでとうございます。そして、今日の良き日に保護者の皆様を始め多くのご来賓の方々においでいただきました。心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

さて、皆さんは屋内運動場の南に胸像が建っていることを知っていますか。その胸像の表には、柴田勝一先生、裏には、祥雲 昭和30年7月 有志一同と書いてあります。祥雲とは「めでたいことが起こる兆しとして現れる雲」のことですから、柴田先生の胸像が建って本当に良かった、おめでたい、先生の威徳が顕彰できてよかったという喜びの気持ちがこの言葉に込められていると思います。

実はこの胸像は、南舎の前に立っていたようです。校舎の立替工事のために、今の場所に移動したのだそうです。古い学校には、学校づくりに努力した人が銅像や胸像として建てられているところがあります。銅像や胸像が建つのはよほどのことがあったからです。それにしても、担任や教頭先生を称えた胸像があるところは、この地方では、瀬部小学校だけです。しかも、驚くことにご退職の4か月後に胸像が建ったのです。これを見ても、どれだけ柴田先生が教え子や保護者そして地域の方々に慕われていたかが分かります。

教育は、教師と子どもとの信頼関係によって成り立ちます。教師の子どもへの熱意が、保護者と地域を動かしたのです。柴田先生の胸像はそのことを物語っています。

柴田先生は、明治36年2月17日に、丹羽郡古知野町赤童子(現在 江南市赤童子御宿)でお生まれになりました。大正14年4月10日に瀬部小学校の前身、西成第一尋常小学校の先生となります。そして、昭和の初期から戦中、戦後の混乱期を全力で児童の教育に努力され、昭和23年4月から27年3月まで教頭を勤められます。そして、27年4月から30年3月まで再び担任として勤務されます。合わせて30年間もの間、瀬部小学校にお勤めになりました。同じ学校で、30年以上お勤めになった先生を、私は知りません。そして、その30年間の約3分の1が1年生を、約5分の1が6年生を担当されています。どの学年も大切ですが、学校生活が始まる最初の1年と小学校教育のまとめとしての6年の担任は特に神経を使います。

1年生で入学した子どもが成人して結婚する。そして、その子どもが、親子2代にわたって教えてもらったり、何人もの子どもがお世話になったりする家庭もあったはずですが、ですから、一人ひとりの家族構成や家庭状況までも全て知ってみえる柴田先生への保護者の信頼は、絶大なものだったようです。

柴田先生の口癖は「勘考せよ」でした。「勘考する」は最近あまり使われなくなりましたが、その意味は「自分たちで大いに力いっぱい考えて行動せよ」ということのようにです。つまり、柴田先生は子どもの持つ創造性・可能性に着目されていたのだと思います。子どもたちの自主性を育む教育をめざしてみえたのです。柴田先生は、優しいけれども厳しい先生でしたという声もあります。それは、きっと子どもたちで問題を解決せよという学び方教育を徹底されたからだだと思います。何でも教えてしまう教育ではなくて、子どもたちで創造し、体験してみることが「生きる力」になるのだ、本当に学ぶとは自分たちの力で問題を解決することなのだと思えられたのだと思います。

この柴田先生の「勘考せよ」という言葉は、平成16年4月21日に来校された時之島

東島出身で東京両国にある「玉屋」という蕎麦屋（元禄二八そば処両国・玉屋 東京都墨田区両国 3-21-16【電話】03-3631-3844 JR 総武線両国駅から2分 営業時間 11:00~15:00<日曜、祝日は~15:30>17:00~20:00 定休日：木曜）を営んでいらっしゃる原一弘さん（俳優の大橋巨泉と同じ慶応ボーイの同級生で野球と一緒にされたと言う）から聞いた話です。柴田先生は、常に「このことは、君たちで勘考せよ」と言われたそうです。先生からそう言われる度に、子どもたちで全力を振り絞って考え行動し解決したそうです。そうすると、必ず褒めて、次の学習や作業を「勘考せよ」と課題をくださったそうです。それ以来、自分で勘考する習慣が身について、何か困ったことが起きる度に「勘考せよ」と自身を励まし、蕎麦屋の経営に役立てられているといえます。平成11年、まだ皆さんが幼稚園や保育園の頃、当時のNHK大河ドラマ「元禄繚乱」（平成11年1月10日~平成11年12月12日）が放映されていました。これは大石内蔵助を中心とする赤穂浪士が吉良邸に討ち入りする事件を扱っていました。原さんは何とかこれを蕎麦屋の経営に生かそうと「勘考」します。その結果、「討ち入り蕎麦」を編み出します。これはたちまち有名となりテレビでも紹介されます。吉良上野介役の石坂浩二をはじめとする多数の芸能人も来店され、ヒット商品になったそうです（平成16年度「瀬部小だより6月号」より）。原さんにとって柴田先生の「勘考せよ」の一言は人生を生き抜く力となっているのです。

ところで、山本有三の作品に「路傍の石」という物語があります。路傍の石というのは「踏まれてもけられても道ばたにがんばっている石」という意味です。この物語の主人公は「愛川吾一」少年です。

吾一少年は、友だち同士の自慢話のもとで、鉄橋にぶら下がり危うく列車にひかれそうになりました。その時、担任の次野先生は吾一少年に語りかけます。「よく世間では、この次に生まれかわったら・・・なんて言うけれども、人間は一度死んでしまったらそれっきりだ。人間、一生なんてものは、一度しかないんだ。人間は死ぬことじゃない。生きることだ。」「いいかい吾一、たった一人しかない自分を、たった一度しかない人生を、輝き出せなかったら、人間生まれてきた甲斐がないじゃないか。」自分を大事にすることは、周りの人、家族や友だちを大切にすることにつながります。だから、吾一よ、自分を粗末にすることは、周りの人にも迷惑をかけることになるのだということです。そして、「吾一、おまえというものは、世界中にたった一人しかいない人間、一度しかない人生なんだぞ。」先生は眼に涙をたたえながら、愛川吾一よ、つらいことや嫌なことがたくさんあると思うけれど、それに負けないで生きぬくのだと諭したのです。

成績が悪かったからといってしょぼくしてはいけません。また、良かったからといって、怠けてしまったら、また元に戻ってしまいます。友だちのことや家のことでも失敗もあります。成功もあります。しかし、それにいつまでもとらわれてはいけません。どうなっても、どんなことがあっても、どこまでも前を向いてまたがんばるのです。

人間、勘考しさえすれば、何とかできるのです。いや何とかするのです。そう決めて、また今日よりは明日に向かって、堂々とはばたいてほしいと思います。

最後になりましたが、柴田先生の胸像は、この体育館の向こうから私たち向かって、「さあ、瀬部小学校の子どもたちよ、心と体を鍛え、自分の可能性を信じて全力で『勘考せよ』』と呼びかけているように思えてなりません。

瀬部小学校は、100年を終えて、次の100年に向けて新たな一年目の出発を、皆さんと一緒に踏み出しました。皆さんの一歩が後に続く後輩の模範となります。中学校でも百周年を飾った瀬部小学校出身者である誇りを忘れず、瀬部小期待の星として、大きく活躍してくれることを願っています。本日は本当におめでとうございました。

平成20年3月19日

一宮市立瀬部小学校 校長 南澤力男